



キャベツ、ブロッコリーの 黒すす病等の防除

西脇 謙二

近年、キャベツ、ブロッコリーで、アルタナリア（*Alternaria*）属の糸状菌による黒すす病等が多発しています。収量や品質に大きく影響を及ぼすことから、注意が必要です。

1. 黒すす病等の症状（写真参照）

キャベツでは葉、ブロッコリーでは茎葉及び花蕾に病徴が生じます。葉（茎葉）では、褐色小斑点や褐色輪紋状の大型病斑ができます。ブロッコリー花蕾部では黒色小斑点を形成し、多湿条件下では黒褐色のカビが生じることから、商品価値が著しく低下します。

2. 黒すす病等の病原菌

病原菌として、2種のアルタナリア属菌が知られています（表1）。キャベツ黒斑病はA・ブラシカエ、キャベツ黒すす病はA・ブラシシコラが病原菌で、ブロッコリー黒すす病はこの2種が病原菌とされています。生育適温からみると、A・ブラシシコラがやや高温期に、A・ブラシカエが秋～冬や春先の低温期に発病するとされています。分生子は、A・ブラシカエがやや大きいですが、肉眼の観

察で病原菌を区分することは難しいです。

3. 防除対策

黒すす病等の病原菌は、種子伝染のほか、空気伝染します。種子伝染では、発芽後に子葉で病斑が生じ、さらに分生子がかん水とともに広がります。空気感染は、感染植物の残さ上に形成された分生子が風雨で飛散し感染が広がります。

育苗期間中は湿度が高く、発病に好適な条件になりやすいことから、注意が必要です。

ほ場での被害残さは黒すす病等の感染源となるので、ほ場から持ち出したり、分解促進を図り、ほ場を清潔に保ちましょう。台風や大雨などの強風雨後は、黒すす病等が急速に蔓延するため、栽培ほ場の排水対策を徹底しましょう。生育期の肥切れ

や、密植による風通しが悪い場合も発病を助長します。

育苗期や定植後に、黒すす病等に効果のある農薬で防除を徹底しましょう。黒すす病等に有効な農薬は、FRACの7系統(QoI)や11系統(SDHI)が主体とされていますが、セイビアーフロアブル20やキノンドーフロアブルなどで他の病害と同時防除を行い、薬剤耐性が発達しないよう努めましょう。

なお、県ではJ Aグループと連携して黒すす病の防除対策に取り組んでおり、得られた知見をJ Aの営農情報等に反映させていただきますので、最新の情報を入手するよう心がけましょう。

表1 アブラナ科野菜の黒すす病、黒斑病の病原菌

作物／病名	キャベツ	黒斑病	黒すす病
	ブロッコリー	黒すす病	
病原菌		A・ブラシカエ (<i>Alternaria brassicae</i>)	A・ブラシシコラ (<i>Alternaria brassicicola</i>)
分生子の大きさ		75～350×20～30μm	18～130×8.0～20μm
菌の生育温度		2～30℃	5～37℃
菌の生育最適温度		23℃	25℃



写真 キャベツ結球部の症状
(外葉にも症状が見られる)



写真 輪紋状の病徴



写真 ブロッコリー花蕾での症状